

『広辞苑』「日中共同声明」解説文の訂正を約束

岩波書店は誠意見せるか？

理事・事務局次長 富澤 賢公
とみさわ けんこう



台湾が中国に帰属との重大な誤り

台湾在住の三宅教子^{みやけのりこ}さんは台湾国際放送「RTI」の特約日本語アナウンサーで、私も台湾で二度ほどお会いしたことがある。温厚な中にもしつかりしたお考えをお持ちの方である。

二月二十日発行のメルマガ「台湾の声」に、「広辞苑問題―権威ある辞書の重大な誤り」と題して三宅さんの投書が掲載された。三宅さんの使っているカシオ電子辞書「EX-word」に『広辞苑』が収載されていて、「日中共同声明」の項目が「日本は中華人民共和国を唯一の正統政府と認め、台湾がこれに帰属することを承認し」とあり、誤っているという指摘だ。ここ

で述べるまでもなく、日本は「日中共同声明」において、台湾が中国に帰属していることを承認などしていない。

「理解し、尊重」しただけである。三宅さんはこの点を、黄昭堂氏の解説を引用してその誤りを指摘していた。

私も同じものを持っていた。あまり使わず、机の引き出しの奥にしまつてあったものを引っ張り出して確認してみた。これは由々しき問題である。早速二月二十一日、岩波書店に抗議のメールを送り、前述の解釈を説明した上で回答を求めた。しかし、六日経つてもなしのつぶてであった。

そこで二月二十六日、再び下記のメールを送った。

《未だにお返事がありませんが、貴社

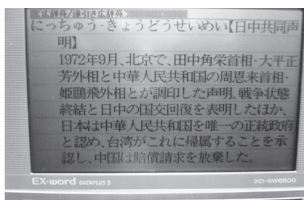
は、事の重大さをまだ認識しておられないか、辞書を作るものとしての自覚がないと解釈してもよろしいのでしょうか。純粹に歴史を学ぶものとして心を痛めています。

これで岩波書店は死にました。先達の努力を無に帰しました。一般の読者の疑問に対して、回答をしないということは、先進国の出版社の取る態度ではありません。一週間以内に、この件に対する私の疑問に、自信を持った、ご回答を御願いたします。もしそれがなければ、今後一切貴社の出版物は手にしません。買い求めたカシオの電子辞書と広辞苑は販売店に訳を言って返品させていただきます。》

岩波書店は誤りを認めたが……

これには意外にも、翌二月二十七日に岩波書店から返信が来た。

《日中共同声明の文言と広辞苑の解説の一部とくいちがっております。恐縮でございます。刷りを改める機会があ



カシオ電子辞書「EX-word」に掲載されている『日中共同声明』の解説文。日本政府は台湾の中国帰属を承認しているが、実際には同声明で日本は台湾がこれに帰属することを承認し、中国は賠償請求を放棄した。

り次第、訂正いたします。》

いささか紋切り型ではあるが、一応岩波側は誤りを認めた格好になった次第である。

しかし、「刷りを改める」のはいつのことか。今年、岩波書店は「十年ぶりの大改定」と銘打って第六版『広辞苑』を宣伝販売している。「刷りを改める」のは、第六版の第二刷ということになるのか。または次の「十年ぶりの大改定」かもしれない。

だが、これは岩波側の言い逃れに過ぎない。なぜなら、岩波書店のホームページには「あしや【芦屋・蘆屋】」の項目について「『広辞苑第六版』お

詫びと訂正」が掲載され、正しい解説文まで載っている。だが、「日中共同声明」の項目についての「お詫びと訂正」は掲載されていないからである。

誤りを認めたのだから、せめてホームページで「あしや」と同様の措置を取るべきだろう。ましてや「日中共同声明」は国際問題ともなる重大性、あるいは教育的な面からしても、「あしや」以上に影響力が大きいことは誰の目にも明らかだ。書店に通知し、販売中の『広辞苑』に訂正表を入れるなどして周知徹底をはかることが出版社の良心ではないのか。口先だけでお茶を濁してもらっては困るのだ。

岩波書店の誠意に期待したい

それともう一つ。この問題を、先の電子辞書を製造販売しているカシオのお客様相談センターに電話で質してみた。これには四、五日で返事が来た。

その内容は、岩波書店に確認したところ「ポツダム宣言とか中華人民共和

国は唯一の合法政権とか、台湾は中国の不可分の領土とかで、そのような認識で作成した」という返事であった。車を運転中だったのでメモも取れず、中途半端な結果に終わったが、カシオの電子辞書は中国製である。学研 Toys の地球儀も中国製であった。

余談ながら、松下電器は十年前に販売した欠陥暖房機の回収をテレビでずいぶん告知した。企業にとって製品不良や苦情は避けられない。大事なことは、それに対していかに誠意をもって、それがいかに迅速に対応するかが鍵になる。それいかんによって、結果は天と地ほどの違いとなる。対応がよいと、お客は逆に信頼してくれるものがある。それが次の商いにも確実につながる。これが日本である。

しかし、このような日本の手法が全く通じない国が近くにある。残念なことであるし、肝に銘じておかなければならないことである。岩波書店にはぜひ誠意を見せてもらいたいものだ。